

ブルゴーニュの たっけい 巨石とキリスト磔刑像

ジャン・コラルド

遠く新石器時代から、私たちの大地のいたるところで、人々は地面から石を掘り出し、それを天に向けて立てようとしてきました。できるだけ手ごろな石を積み上げることから始まり、紀元前2000年代からは巨大な岩石の塊を用いるようになりました。これらの岩石は、学術的には“Mgalithes”（メガリット）と呼ばれ、巨石記念物を意味します。

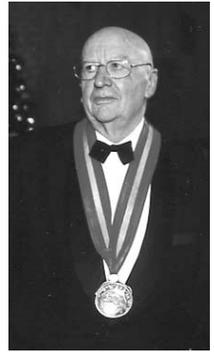
フランスでこういった遺跡が一番多く見受けられる場所は、ブルターニュ地方です。特に、有名な景勝地カルナックには、1,169個の“MENHIRS”（メンヒル）が11列に並んでそびえ立っています。今日、次のような記念物を意味する名称はブルトン（ブルターニュ）語を起源としています。メンヒルは直立に置かれた石を指し、“DOLMENS”（ドルメン）はテーブルの形に水平に置かれた石を指します。ブルトン語で“Men”（メン）は石、“Hir”（ヒル）は長い、“Dol”（ドル）はテーブルを意味します。私たちの地方ブルゴーニュは、ブルターニュほどこの種の記念物が豊富ではありませんが、過酷な気候や後の世代の破壊行為を免れた記念物がいくつか残っています。ソーヌ=エ=ロワール県のクーシュ近郊を訪れば、エボワニーの5つの巨石を目にすることができます。また、オート=コート=ド=ニュイを見おろす森に囲まれたテルナン村にもドルメンがあります。

ところで、メガリット消失の主な原因は、パガニズム（異教）*1の痕跡をすべて消し去るという使命にとりつかれた、初期のキリスト教伝道者たちの盲信にあります。658年にナント公会議は、人民が崇拝していた記念石を汚す決定を下しました。789年には、シャルルマーニュ皇帝が記念石の破壊を命じました。とはいうものの、彼は私たちにコルトン・シャルルマーニュという銘酒を残してくれましたので、この偶像破壊行為は許してやることにいたしましょう。

私たちの祖先の石に対する信仰は、聖書のお話を通して私たちに伝えられている信仰に近いものでした。聖書には、「アブラハムは石を立て、祭壇とした。ヤコブは石を立て、祭壇とした……モーセは石を立て、祭壇とした」とあります。しかし、伝道者である農村の修道士たちは、こういった原始的な建造物を悪魔の仕業としか見なませんでした。ただ、最も巨大な石は破壊者のハンマーをものともみませんでしたので、彼らはそういった巨石をキリスト教に改宗させることを企てました。その方法は、十字架から始まり、聖者の像、聖母マリアの像と、キリスト教徒の印を石に刻むことだったのです。

Jean Collardot / ジャン・コラルド

1925年、フランスのニュー=サン=ジヨルジュ市生まれ。69年から95年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。外国語、歴史、宗教哲学、デッサン、絵画について造詣が深く、7カ国語を解する。



てっぺんがキリストの十字架像の形に切り取られたメンヒルもいくつかあります。こうしてメンヒルを改宗し新たに使用することには、新カトリック改宗者*2を、彼らが習慣として信仰を実践していた礼拝の場に引き留めるという利点がありました。それらの場所は、地球放射がよい影響をもたらすため気象環境がよいと見なされていました。こういった信仰ならびに、地方の慣習や伝統を継承しようとする気持ちから、礼拝堂、教会、大聖堂の建設者は自分たちの建造物を古代の神殿があった場所に建立するようになったのです。その結果、初期の礼拝堂は巨石と共存することができました。また、5世紀までは教会の身廊とは分離された建造物であった鐘楼も、これと同じ建築上のビジョンに基づいて建造されるようになったようです。

村で最初の石の建造物はおそらく教会でした。一般に家というのは木の骨組みまでできていて、それにわらを混ぜた粘土の壁を加え、麦わらで屋根を葺いたものです。平野ではこういった建築方法が一般的でしたが、私たちの丘陵地帯のドウ栽培者たちは石に恵まれていました。丘の斜面には地表に頭をのぞかせた建築用の石や、屋根を葺くのに用いられる“laves”（板石）と呼ばれる大きな平たい石がふんだんにあったのです。

教会とその鐘楼は村の中心に、そして神のご加護を受ける拠り所となりました。キリスト教信者たちの願いはただ一つ、自分の魂が確実に天に直行できるように、教会の地中に埋められることでした。彼らの魂は天に昇ったとしても、それが離脱したばかりの哀れなきがらは、その安息を祈るためにきてくれた信者たちを不快にさせるにおいを発散しながら分解します。その結果、人々は故人を教会のまわりの空き地に埋葬することに同意せざるを得なかったのです。そして彼らの魂に神のご加護を保証し家族を安心させるために、キリストが人々を救うために耐え抜いた受難を思い起こさせる磔刑像を、墓地のまん中に建てることにしたのです。

このキリスト磔刑像は古代のメンヒルのそばで見つかることもあります。そのような場合はきまって、双方が同じ役目をもっていただけをうかがえます。たとえば、道の境界線を示したり、古代の神殿の跡を示したりすることです。侵略や宗教戦争のために消失してしまった教会や礼拝堂の跡地には、よくこれらの目印が見受けられます。カトリックの磔刑像は、プロテスタントから奪回された領地の目印と

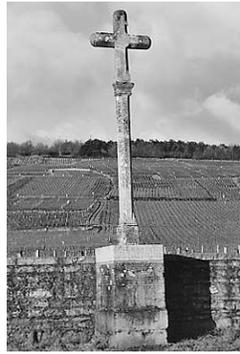


なることもよくあるのです。

敵を国境ではばみ、平和を取り戻したキリスト磔刑像は、1789年のフランス革命で新たな試練を迎えました。この革命により、旧体制を思い起こさせるすべての宗教的シンボルの破壊命令が下されたのです。農民は当局の命令を履行するのにそれほど熱心ではありませんでしたので、都市から愛国派の集団が送り込まれ、あの略奪、破壊行為が行われたのです。それはまるで、古代のメンヒルに対して初期のキリスト教徒がやっていたのと同じような破壊行為でした。しかし農村の人々は自分たちの新しい信仰のシンボルに愛着をもっていましたので、キリスト磔刑像を分解して地中に埋め、革命の熱狂が鎮まった後に組み立て直すということがよくありました。

革命の動乱の後、キリスト磔刑像は自らの居場所を再び見いだすことができました。キリスト磔刑像もまた領地の境目を示していましたが、市町村の境にある最も古いものなどは旅行者の目印の役目を果たしました。たとえば、テンプル騎士団(*3)の十字章やサンチアゴ＝デ＝コンポステラ(*4)への巡礼者の貝殻(*5)がかたどられたいくつかの記念物がこのことを証明しています。ごく最近の19世紀から20世紀初頭にさかのぼるものは、台座に彫られた碑文が示しているように、概して祈願成就や家族の記念日を期して信心深い人が建てた奉納用の十字架です。ヴォーヌ・ロマネにあるキリスト磔刑像の場合は、その名高いドメヌ、ロマネ・コンティのブドウ畑を見守っています。この碑文が彫られた四角形または円形の板石の上に載っている台座は、花や供物を載せることができ、ときとしていけにえの祭壇を思い起こさせるようなさらに幅が広い板状の石が載っていることがあります。昔は、十字架が建てられるときには、主任司祭がそれを祝福するために行列を組織し、ひざまずいて祈りを捧げました。現在の教区民はみなこれにならっているのです。

20世紀の初頭まで、キリスト磔刑像は、“Rogations〔豊作祈願祭〕のために行われた行列行進のゴールの役目を果たしていました。この祭りは、主の昇天の木曜日¹に先立って3日間行われる宗教上の祭典です。この機会に人々は集まり、行列をなして賛美歌を歌いながら、五穀豊稔を神に祈り、動物や作物を脅かす病気や悪天候を追い払います。庶民の知恵によれば、月曜日は干し草、火曜日は穀物、水曜日はブドウについて収穫期の天候を予測するための日と



いうことになっています。水曜日に雨が降ったときは、ブドウ栽培者たちは賛美歌を歌うことはせず、真剣になって守護聖人の連禱(*6)を唱えました。こういった信仰の実践も、ローマ人が以前行っていた信仰に端を発しています。彼ら自身も母なる大地を崇拝するさらに古い伝統からそれを受け継いできたのでした。

今日では、私たちには技術という素晴らしい力がありますので、祈願したり、感謝したりする必要はなくなりました。とはいえ、私たちのブドウ畑のはずれにそびえ立つあの十字架は、天と地(土)の結びつきを象徴しているのです。“terre〔土地〕という語は、日本語の漢字で「土」と書きますが、これは私たちの十字架像を連想させる表意文字といえます。この十字架像は天に向かって伸びる腕でもあります。詩人のアルフォンス・ド・ラマルチャー(*7)が、『瞑想詩集』の中で次のように描写しているのとおり、私たちはその天に郷愁の念をもっています。

人の資質に限りあるも人の願いに限りなし
人間なるもの記憶にある天から落ちし神なり

- (*1)特に古代ギリシア・ローマの多神教を指す。
- (*2)ナントの王令廃止時(1685年)に強制的にカトリックに改宗させられたプロテスタント
- (*3)第一回十字軍(1099年)以降現れたキリスト教武装修道会の一つで、聖地の守護と、領地を通る巡礼者たちの警護に当たった。
- (*4)スペイン北西部の町。使徒ヤコブの葬地の地といわれ、エルサレム、ローマと並ぶキリスト教三大巡礼地の一つ。
- (*5)杖やそれにつるすりょうたんとともに、巡礼に必要なアイテムの一つ。
- (*6)司祭が先唱し、信者が答えるカトリックの祈りの形式
- (*7)1790-1869年。詩人、政治家。『瞑想詩集』によりロマン主義の旗頭となる。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュへいらっしゃいませなか。
 鐘上の結核を生み出すぶどう畑、グルメスタンの霞々、
 中世そのものの街並み、美しい丘が大地や、小さな村々、
 豊かな生命力¹はだたの心もろくも癒す地方、
 それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
 (株)東多摩会館運営 担当：若沢

Tel. 03 3582 5087

